

# 第1章

## 東アジアにおける地域秩序の幻影、道標および追求

シーセン・タン

東アジアに地域秩序が存在しているとする概念は、今日では潜在的に多くの混乱をもたらす展開を考慮すると潜在的に疑わしいものである。なかんずく、地域における中国の力と影響力の増大、戦略的特権を取り戻そうと正常化する日本の再起、および新興核保有国としての北朝鮮の歓迎されない局面は、地域の安定と安全保障に関わる深刻な問題を引き起こす。さらに、東南アジア諸国連合（ASEAN）への法人格付与および東南アジア地域を安全保障共同体へ変質させるというさらに複雑な課題に向けた東南アジアの努力にもかかわらず、テロリズム、不景気、感染症、環境汚染、自然災害などその中の多くの明白な潜在的不安定要因が、地域秩序を幻想でないとしても、とらえどころがないものになっている。東アジアの多国間協力の枠組み ASEAN地域フォーラム、アジア太平洋経済協力会議、ASEANプラス3、東アジアサミット、6者協議およびASEAN の明らかな限界は、こうした枠組みの乱立が本当に東アジアにおける地域秩序の到来を予告するのか、または単にその欠陥を強調するだけなのかについての疑念を引き起こした。

それにもかかわらず、東アジアの安全保障に関する既存の将来的見通しすべてが、東アジアにおける地域秩序の欠如が複合的な脅威の存在する環境を生み出していると見ているわけではない。彼らのスタンスは、地域の不安定と危険性の原因を監視するヨーロッパ的な地域安全保障構造が欠如していることを理由に、アジアに対し悲観的結末を警告する、冷戦終結に伴って現れた多数の予測と明らかに対照を成すものである<sup>1</sup>。どちらかといえば、これらの研究は、自助、勢力の

---

<sup>1</sup> Richard K. Betts, "East Asia and the United States after the Cold War," *International Security*, Vol.18, No.3 (1993/4), pp. 34-77; Barry Buzan and Gerald Segal, "Rethinking East Asian Security," *Survival*, Vol.36, No.2 (1994), pp. 3-21; Paul Dobb, David D. Hale, and Peter Prince,

均衡、同盟、覇権、地域機構、規範の平和的変更および協力、地域共同体など選択肢が多いことによって、東アジアに(または特定の低位機構もしくは複合体の中で)秩序の相対的な指標があることを認めるためのものである<sup>2</sup>。これらの研究は、大部分が「将来、アジア太平洋[おそらく東アジアも含まれよう]は、主要国の勢力の均衡と共同体を基盤とする安全保障秩序の中間に在る性格の地域だろう」と結論する<sup>3</sup>。

### 道標および追求

東アジアに地域秩序が存在する否かの問題がかかる対照的な見解を導き出すことは、明らかに地域そのもののあいまいで複雑な性格に起因する。重要なことに、これらの種々雑多な結論は、東アジア地域秩序についておそらく最も著名な研究者、故マイケル・リーファアの鋭い観察に等しく存在しており、我々を特に驚かせるものでない。本章は、東アジア秩序の今日的な理解に対するリーファアの貢献が変わらぬ重要性をもっていることについて論じるものである。これは、リーファアの考えが常に正しかったことを意味するものでなく、またリーファアが扱ったと同じ政治領域の一部をカバーする他のより理論的、概念的また方法論的に緻密なアナリストが、東アジアに関する我々の知識にとって適切でないことを意味するものでもない。すなわち、ASEANそのものを東アジア全体のある種の機構の中心たろうとするASEANの努力 および中国、日本、インド、ロシア、ならびに米国など大国がかかる役割を、意図的でないにしてもASEANへ譲るという明らかな相応の意思 が、基本的な意味で(リーファアの著作にある)「地

---

“Asia’s Insecurity,” *Survival*, Vol.41, No. 3 (1999), pp. 5-20;および Aaron L. Friedberg, “Ripe for Rivalry: Prospects for Peace in a Multipolar Asia,” *International Security*, Vol.18, No.3 (1993/4), pp. 5-33を参照。

<sup>2</sup> Muthiah Alagappa, “Managing Asian Security: Competition, Cooperation, and Evolutionary Change,” in Muthiah Alagappa, ed., *Asian Security Order: Instrumental and Normative Features* (Stanford: Stanford University Press, 2003), pp. 571-606; See Seng Tan and Amitav Acharya, eds., *Asia-Pacific Security Cooperation: National Interests and Regional Order* (Armonk: ME Sharpe, 2004).

<sup>3</sup> G. John Ikenberry and Jitsuo Tsuchiyama, “Between balance of power and community: the future of multilateral security co-operation in Asia-Pacific,” *International Relations of the Asia-Pacific*, Vol.2, No.1 (2002), pp. 69-94のp. 69を参照。

域安全保障のASEANモデルの拡大」<sup>4</sup>であれば、なおさら我々にとってリーファ－の地域秩序認識への影響に注目し、現代東アジア地域に対するかかる潜在的効果を調査する理由がある。

確かに、リーファ－の援用は、彼の考えについて早まった結論を導く可能性がある。例えば、現実主義者でない者は、特定の観念論に束縛され、しばしばリーファ－に、もしくは少なくとも彼の著作に現実主義を照らし出す。(執筆者を含め)多くのアナリストは、かつてリーファ－を伝統的現実主義者であれネオリアリストの類であれ、現実主義者として風刺した<sup>5</sup>。さらに、リーファ－の著作は、特に地域秩序問題を扱うものについて理論的知識、概念的正確さおよび分析的緻密さに欠けていると、長い間批判されてきた<sup>6</sup>。なお、彼の概念が、東アジアにおける国際関係の研究において今日知的評価を得る他の概念に引き続き示され

<sup>4</sup> Michael Leifer, *The ASEAN Regional Forum: Extending ASEAN's Model of Regional Security*, Adelphi Paper 302 (London: IISS/Oxford University Press, 1996).

<sup>5</sup> Sorpong Peou, "Realism and constructivism in Southeast Asian security studies today: a review essay," *The Pacific Review*, Vol.15, No.1 (2002), pp. 119-38; See Seng Tan, "Untying Leifer's discourse on order and power," in Joseph Chinyong Liow and Ralf Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essays in Memory of Michael Leifer* (London and New York: Routledge, 2006), pp. 61-77.

<sup>6</sup> Joseph Chinyong Liow and Ralf Emmers, "Introduction," in Liow and Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essays in Memory of Michael Leifer*, pp. 1-9のp. 3を参照。難しさの相当の部分は、リーファ－の知的偏見が英国学派の好む多元論に傾いて見えることと明らかに関係がある。英国学派の支持者 特に、新興国の国際関係と政治に対するリーファ－の思想に明らかに影響を与えたマーチン・ワイトやヘドレー・ブルなどの主要な思想家や、チャールス・マニング、マイケル・オークショットおよびエリー・ケドゥーリーは、リトルが知識と理解の明らかに異なる組織を結合させる方法を見つけることを目的とする「多元論的方法論」と呼ぶものに間違いなく引き付けられている。Richard Little, "The English school's contribution to the study of international relations," *European Journal of International Relations*, Vol.6, No.3 (2000), pp. 395-422のp. 397を参照。確かに、彼の著作の中で「勢力の均衡」が重視されていることを考慮すれば、リーファ－の考えは十分に現実主義者のものである。同時に、彼の著作の主要部分を成す「地域秩序」に与えられる最高の地位は、彼が特に地域秩序を規定する方法とともにリーファ－を明確に英国学派に位置づけるものである。実際、ある者が厳しく探し回れば、間違いなくポストモダン感覚を暗示するものに加え、研究方法において構成主義者と疑わしく思われるリーファ－の考えの断片を必ず突き止める。同じことはハンス・モーゲンソーの著作にもいえる。Liow and Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essay in Memory of Michael Leifer* 所収のアチャリヤとタンによる各論文を参照。執筆者の論点は、意識的であれそうでないにしろ、リーファ－を実際はそうでない何かに作り上げるのではなく、彼の表面上の現実主義概念の傾向にかかわらず、彼がそれによって活動したであろう(今日の用語では)「分析的に折衷主義の傾向」を率直に強調することである。

ていることもその理由である。すなわち、東アジア地域秩序についての議論は、リーファアの「幻影」から逃れることはできない。

リーファアの地域秩序に関する見解から、少なくとも注目すべき7つの教訓または「道標」を引き出すことができる。リーファアは地域秩序を東南アジアの国際政治を測る基準として用いたが、それにもかかわらず、少なくとも米国の合理主義者による国際関係論の今日的基準に従えば、彼は概念的に未発展で、方法論的にあいまいなやり方でそれを行ったことを銘記すべきである。「秩序」と「地域秩序」は、主としてリーファアの精力的な貢献のおかげで、英国学派の国際関係論に関連する派生的概念として、東南アジア国際政治の研究に道筋をつけたことは注目される<sup>7</sup>。

### とらえどころのない地域秩序

地域秩序は「マイケル・リーファアが東南アジアに求めたものであった。それは、東南アジアとアジア太平洋の国際関係の評価を選択する彼の尺度であった。東南アジアに関するリーファアのすべての著作で繰り返されるテーマは、地域秩序はいかにとらえどころがないか、また、ときにそれがいかに幻想であるかについてであった<sup>8</sup>。」というものもある。どちらかといえば、リーファアは、地域秩序を確立するという野心的目標を実現するための東南アジア地域、特にASEANの明らかな無能力を感じたことを強調する傾向があったと思われる。リーファアがASEANのバンコク宣言について述べたとおり、「宣言をその前文を含み全体として解釈すれば、文書に固有のものが大望の表現であることは明白である。その野心は、地域秩序システムの確立である<sup>9</sup>。」彼は他の著書で、東南アジア友好協力条約は「秩序ある国家間関係の広範な組織の創設を試みるため採択された手段

<sup>7</sup> Yuen Foong Khong, "Michael Leifer and the prerequisites of regional order in Southeast Asia," in Liow and Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essay in Memory of Michael Leifer*, pp. 29-45のp. 30を参照。

<sup>8</sup> Khong, "Michael Leifer and the prerequisites of regional order in Southeast Asia," p. 33.

<sup>9</sup> Michael Leifer, *ASEAN's Search for Regional Order* (Singapore: Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore, 1987), p. 1.

である」ことを認めた<sup>10</sup>。彼はこのように理解して、地域秩序を地域諸国だけのものではなく、同じ様に東南アジアに多様な利害関係を持つ域外の強国を含む「広範に受け入れられる地域関係の構造<sup>11</sup>」として見た。

換言すれば、いくつかの点から見て、リーファーによる地域関係の意図的な物質主義者の説明にかかわらず<sup>12</sup>、地域秩序について彼の理解が同様に前提とした論拠は、社会的／相互主観的なものである。このことは、彼が解釈において純粋な勢力関係を重視する意義、ましてやその存在を否定するものではない。(後述のとおり)米国の戦略的優越など軍事行動的なものとして、軍事力による均衡が明らかに彼の評価に重要な場所を占める。しかしながら、我々はリーファーに物質的要素と観念的要素を別の考察として扱う意図をどこにも見つけ出すことができない。地域秩序が必然的に伴うものは、「国家間行為の基礎について共通の負担義務によって形成される地域政府間関係の安定した構造の存在であった<sup>13</sup>。」この問題の「国家間行為の基礎」と「共通の負担義務」との関係は、リーファーがより広い東アジアの文脈で行った同様の論議で明らかにされた。

控えめにいっても、力の配分の観点で、東アジアの地域均衡の一般的な型は、安定の手段を体現していると議論することは可能である。しかし、それは国家間行為の基本的規範以上のものを必要とする実行可能な地域秩序と同じではない。また、それは域内国と域外国の間の相互関係について一連の前提の共有が存在することを必要とする<sup>14</sup>。

この意味において地域秩序は、諸国家が「対話と同意によって国家間関係を取り仕切る共通の規則と機構を設立し、これらの取決めを維持することが共通の利

<sup>10</sup> Michael Leifer, *Conflict and Regional Order in South-East Asia*, Adelphi Paper 162 (London: International Institute of Strategic Studies, 1980), p. 34.

<sup>11</sup> Michael Leifer, "The balance of power and regional order," in Michael Leifer, ed., *The Balance of Power in East Asia* (London: Macmillan, 1986), p. 151.傍点は執筆者。

<sup>12</sup> これは、ポーが"Realism and constructivism in Southeast Asian security studies today: a review essay"の中で、リーファーの著作をネオリアリスト傾向として暗黙に分類することから推論し、さらにこれは観念形式要素に対して物質的要素に優位性を与えようとしていると推定する。Liow and Emmers, "Introduction," p. 4.

<sup>13</sup> Michael Leifer, *ASEAN's Search for Regional Order*, p. 1.

<sup>14</sup> Leifer, "The balance of power and regional order," pp. 151-52.

益であると認識する<sup>15</sup>」国際社会を意味するとも理解することができる。ブルは他の著作で、どんな時に国際社会が成立するかについて次のように主張する。

国家社会は……一定の共通の利益と共通の価値を自覚する国家のグループが、彼らの関係において相互に共通の規則に拘束されることを理解し、共通の制度における責任を分担する意味で社会を形成するとき成立する……彼らはお互いの独立の要求を尊重しなければならない……彼らは彼らが締結する協定を尊重しなければならない……彼らはお互いに対して武力を行使する上で一定の制約に従わなければならない<sup>16</sup>。

この立場からいえば、東アジアでは諸国間の地域秩序の必要条件である共通の前提が欠けており、少なくともリーファーにとっては、地域国家間の秩序の欠如 国家がお互いに持つ不信感を一部の原因とする秩序の欠如 を示すものである。

地域的事業は、参加国の脆弱性感覚のような政治生活の根源的事実は自由に変えられないということの完全な理解に基づいて着手された。換言すれば、対外政策は加盟国の間で常に問題となる。今は和解している国々も潜在的敵国で有り続けるかもしれない<sup>17</sup>。

リーファーは他の著作で、地域安全保障のダイナミクスは「地域秩序の概念が不適切な参照基準となるような競争にさらされている<sup>18</sup>」と述べた。その結果、「[東南アジアにおいて]本来の意味での地域秩序は、常にASEANの組織的能力を超えたものとなっている<sup>19</sup>。」

リーファーはこのように規定して、どれだけ多くの資源と強い意思を地域秩序の達成の試みに集中しても、東アジアおよび東南アジアにおいては、地域秩序の

---

<sup>15</sup> Hedley Bull and Adam Watson, "Introduction," in Hedley Bull and Adam Watson eds., *Expansion of International Society* (Oxford University Press, 1984), p. 1.

<sup>16</sup> Hedley Bull, *The Anarchical Society: A Study of Order in the World Politics* (London: Macmillan, 1977), p. 13.

<sup>17</sup> Leifer, *ASEAN's Search for Regional Order*, p. 18.

<sup>18</sup> Leifer, "The balance of power and regional order," p. 154.

<sup>19</sup> Michael Leifer, *ASEAN and the Security of South-East Asia* (London: Routledge, 1989), p. 143.

形成はともにむなしい夢であると明確な結論を出した。この点でいえば、(下記で議論する)アジアにおける地域安全保障に関する現代の論争は、ある意味、リーファーが(初めてでなければ)すでに組み立てた質問に対する回答である。

それでも、「ある種」の地域秩序は存在する

東アジアと東南アジアの地域秩序のとらえにくさを議論したにもかかわらず、同じ理由で、リーファーはそれでも地域秩序に関するある程度の概念的あいまいさを残そうとしたことは興味深い。矛盾したようにも思えるが、彼は地域秩序のように見えるものの形成を保証するに十分な、ASEAN加盟国間に存在するある程度の理解の共有を、きわめて限定的にはあるが、暗に提示しようとした。

広義の意味での地域秩序はASEANの能力を超える問題であっても、ある種の秩序が域内レベルで実現された。確立した協力の習慣に支えられるASEAN域内の国家間の緊張の管理は、安全保障共同体としての意識をもたらした……広義の意味での地域秩序の問題は、ASEANの現在の能力を越えるものであるが、もっと限定された形の地域秩序も、ASEAN加盟国間の1967年8月以前の関係の状態と比較して確かに重要な意義がある<sup>20</sup>。

これは、どこから見ても重要な譲歩であり、地域秩序形成における漸進主義的または段階的理解を潜在的に支持するものである。この時点で、秩序には限定句がついている。リーファーが地域について「どの程度の秩序」が存在するか尋ねることはまずないが、彼は「秩序があるかどうか」を問う傾向がある<sup>21</sup>。少なくとも上に引用した研究に関する限り、彼の譲歩は、たとえ暗黙のうちにてであっても、「どの程度の秩序」という問いへの予備的考察に間違いなく道を開いた。最近の学術的努力も、地域秩序のプロセスはおそらく段階的であり、そうであれば、単純なものから複雑なものまで異なった形態の地域秩序や、秩序へ向う異なる道、

---

<sup>20</sup> Leifer, *ASEAN's Search for Regional Order*, p. 13, 15.

<sup>21</sup> Khong, "Michael Leifer and the prerequisites of regional order in Southeast Asia," p. 37.

秩序が依って立つ多種多様な柱について言及することは適切であるとする<sup>22</sup>。

例えば、冷戦後の東アジア国際関係に関する過剰な悲観的説明は、ヨーロッパと比較してこの地域は「危険」で<sup>23</sup>、「大国の紛争の場であり<sup>24</sup>」、また不安定と根拠のない勢力均衡の争い<sup>25</sup>に満ちた危険の多い将来を運命付けられていると説明する。これに対して、スタンフォード大学出版が2003年に出版した『アジアの安全保障秩序』におけるムタイア・アラガッパと彼の協力者チームの権威ある説明は、現代のアジアにおいて「ある種」の地域秩序、特にリーファ어의用語を使うと、いくつかの規範的・法制度的特徴を持つ「手段的」多様性のある地域秩序の存在を明白に主張している。

アジア諸国における安全保障の支配的な方向は、攻撃と侵略ではなく防衛と抑止である。さらに、勢力と影響力をめぐる争いなど現実主義者の特徴が、規範的制約や、経済的相互依存と協力関係の増大によって軽減される。この見方を反映して、アジアにおける安全保障秩序も、同様に規範的・契約的特徴を持つ。この組合せは、秩序の目標、アジアにおける規範の枠組みを構成する原則、地域機構の目的および役割、ならびに秩序の領域において明らかである<sup>26</sup>。

アジア全体の「規範的枠組み」が明白に存在しているというアラガッパ派の前提が正しいとして、リーファ어도（もし彼が今日存命であれば）安全保障のASEANモデルの延長という意味で、東アジアについて同様の評価を行うか想像してみるのも面白い。同モデルは、東アジアサミットへの参加の前提条件として（インド、オーストラリア、ニュージーランド、現在はフランスまで含む）地域

<sup>22</sup> 例えば、Etel Solingen, *Regional Orders at Century's Dawn: Global and Domestic Influences on Grand Strategy* (Princeton: Princeton University Press, 1998); William T. Tow, *Asia-Pacific Strategic Relations: Seeking Convergent Security* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001); Alagappa, "Managing Asian Security: Competition, Cooperation, and Evolutionary Change"; Tan and Acharya, *Asia-Pacific Security Cooperation* を参照。

<sup>23</sup> Thomas J. Christensen, "Spirals, Security, and Stability in East Asia," *International Security*, Vol.24, No.4 (2000), pp. 195-200のp. 196を参照。

<sup>24</sup> Friedberg, "Ripe for Rivalry: Prospects for Peace in a Multipolar Asia," p. 7.

<sup>25</sup> Buzan and Gerald Segal, "Rethinking East Asian Security."

<sup>26</sup> Alagappa, "Managing Asian Security: Competition, Cooperation, and Evolutionary Change," p. 584.

全体が東南アジア友好協力条約(TAC)に加入するという点によく体现されている。彼は、TACへの地域的参加を根拠に、少なくとも東アジアにおいて地域秩序の萌芽があることを認めたであろうか。条件付き「イエス」の可能性はまったくないとはいえない。

## 地域秩序の中心的制度としての勢力均衡

地域秩序の他に、リーファーが地域関係の評価を試みる上で基礎を置く概念は勢力均衡である。リーファーは、これに関連して、国際政治の唯一の理論があるとするれば、勢力均衡がそれであろうと宣言して広く知られるケネス・ウォルツと、また勢力均衡は国際秩序 およびこの問題に関しては国際社会 が根拠とする主要機構の1つを構成すると考えたブルらと、共通の主張を提示している<sup>27</sup>。本章での焦点は地域秩序であり、またリーファーの勢力均衡についての考えは他の場所で詳しく分析されているので<sup>28</sup>、我々の目的のためにはリーファーがそれによって勢力均衡を理解し、適用した様々な方法について注目すれば足りる。それには状況と政策両面での均衡<sup>29</sup>、性質としての回避的/競争的および連携的/協力的両面での均衡<sup>30</sup>、ソフト/政治手段のみならずハード/軍事手段を含む両面での均衡<sup>31</sup>、力学的均衡に関与する国家による戦略的中庸もしくは抑制の原因と結果両面での均衡などが含まれる<sup>32</sup>。換言すれば、数多くの研究が明らかにした<sup>33</sup>きわめて柔軟な勢力均衡概念を含む多様な意味とパラドックスは、同様に勢力

<sup>27</sup> Bull, *The Anarchical Society*.

<sup>28</sup> 例えば、Jürgen Haacke, "Michael Leifer, the balance of power and international relations theory," in Liow and Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essays in Memory of Michael Leifer*, pp. 46-60を参照。

<sup>29</sup> Leifer, "The balance of power and regional order," pp. 154-55.

<sup>30</sup> Leifer, "The balance of power and regional order," p. 145; Leifer, *The ASEAN Regional Forum*, p. 13; Leifer, *ASEAN and the Security of South-East Asia*, pp. 5-6.

<sup>31</sup> Leifer, "The balance of power and regional order."

<sup>32</sup> Leifer, *The ASEAN Regional Forum*, pp. 57-58.

<sup>33</sup> Inis L. Claude, "The Balance of Power Revisited," *Review of International Studies*, Vol.15 (1989), pp. 13-25; Ernest B. Haas, "The Balance of Power: Prescription, Concept or Propaganda," in Robert L. Pfaltzgraff, Jr., ed., *Politics and the International System* (Philadelphia: J. B. Lippincott Company, 1969); Richard Little, "A 'Balance of Power'?" in Greg Fry and Jacinta O'Hagen, eds., *Contending Images of World Politics* (London: Macmillan,

均衡を地域秩序の中心的構成要素として見るリーファアの柔軟な論じ方におそらく見出されるであろう。

東アジアが長い間、何にも増して勢力均衡によって特徴づけられてきたことは疑う余地はない。例えば、下記に見るとおり、リーファアは、米国が主にその勢力均衡戦略を通して地域秩序の保証人として重大な役割を果たしているとする見解を持っていた<sup>34</sup>。東アジア諸国が勢力均衡、追従 (bandwagoning)、ヘッジング (hedging) またはエンメッシュメント (enmeshment) の観点でどのように中国に対処するかに関する最近の論争は、明らかにこの地域の均衡概念の特徴が続いていることを示唆するものである<sup>35</sup>。なお、ASEANおよびASEANが支持する地域機構、特にARFは、正式に制度化されたやり方ではないにせよ、勢力均衡を促進するフォーラムである。さらに、これらの機構の加盟国は、ARFを力学的均衡において、また間違いなく連携的または協力的アプローチと解釈できる手段において相互に関係する上で受け入れ可能な活動の舞台と見なしている<sup>36</sup>。実際、リーファアと同様に、他の誰もが東アジアにおける勢力の均衡と抑止は、結局は2車線道路であることを認識している<sup>37</sup>。そのうえ、2005年12月の東アジアサミットの発足においては、新機構が (ASEANプラス3のケースがそうであったように) 政治的に中国に支配されない方策を小国が追求し、地域大国の野心を示す中国に対し、台頭する競争相手としてインドとオーストラリアを参加させて、同サミットが基本的に狭い勢力均衡論で縛られることからかろうじて逃れること

2000); John Vasques and Collin Elman, eds., *Realism and the Balance of Power: A New Debate* (Upper Saddle River: Prentice Hall, 2003).

<sup>34</sup> Amitav Acharya and See Seng Tan, "Betwixt balance and community: America, ASEAN, and the security of Southeast Asia," *International Relations of the Asia-Pacific*, Vol.6, No.1 (2006), pp. 37-59; Chong Guan Kwa and See Seng Tan, "The Keystone of World Order," *The Washington Quarterly*, Vol.24, No.3 (2001), pp. 95-103.

<sup>35</sup> 特に、Amitav Acharya, "Will Asia's Past Be Its Future?" *International Security*, Vol.28, No.3 (2003/4), pp. 149-64; Evelyn Goh, "The US-China Relationship and Asia-Pacific Security: Negotiating Change," *Asian Security*, Vol.1, No.3 (2005), pp. 216-44; David C. Kang, "Getting Asia Wrong: The Need for New Analytical Frameworks," *International Security*, Vol.27, No.4 (2003), pp. 57-85を参照。

<sup>36</sup> Ralf Emmers, *Cooperative Security and the Balance of Power in ASEAN and the ARF* (London: Routledge, 2003).

<sup>37</sup> See Seng Tan and Ralph A. Cossa, "Rescuing Realism From the Realists: A Theoretical Note on East Asian Security," in Sheldon W. Simon, ed., *The Many Faces of Asian Security* (Lanham: Rowman and Littlefield, 2001), pp. 15-34.

ができた。

## 地域秩序に戦略上必要な米国の優位性

リーファーは、すでに述べたとおり、米国の役割が東アジアの安定と安全保障にとりきわめて重要であると見なした。リーファーによれば、ASEANにおける安全保障の教義は、「米国が勢力の均衡に決定的役割を果たしているパワーの構造パターンを支持することに依存する<sup>38</sup>」ことであり、この点はハーケも気づいていた<sup>39</sup>。しかし、一部の者が、彼に米国の地域秩序への貢献の重要性<sup>40</sup>を意図的に誇張する役割を課したが、リーファーが米国の役割に与えた明白な意義にかかわらず、彼が米国の戦略的優勢は東アジアにおける安全保障の唯一の柱であること、もしくは少なくとも重要な柱であると信じていたと推測することは、誤りである。

他のアナリストは、米国のパランサーとしての役割を、東アジアにおける米国の(不完全かもしれないが)覇権の優位とらえて反論する者も含めて、この見解を共有するよう思われる。マイケル・マスタンドゥーノによれば、米国は自らをアジア太平洋(および東アジア)の地域秩序の主要な保証人の役割という特権的地位に置く「覇権」戦略を追求してきたという<sup>41</sup>。この点で、マスタンドゥーノは、米国は少なくとも次の4つの手段で地域秩序に寄与していると確認している。すなわち、中国および日本などの競争勢力を、それぞれ異なる手段で食い止めておくこと、地域の弱小国の安全保障上の懸念を軽減し、地域の現状維持を支援することで彼らの地域的統合を促進すること、局地戦争や地域紛争にも拡大しかねない安全保障上の危機を管理すること、および、第二次世界大戦の原因の一部である望ましくない形の国家主義的な経済競争を防止することである。しかし

<sup>38</sup> Leifer, *The ASEAN Regional Forum*, p. 15.

<sup>39</sup> Haacke, "Michael Leifer, the balance of power and international relation theory," p. 51.

<sup>40</sup> Acharya and Tan, "Betwixt balance and community: America, ASEAN, and the security of Southeast Asia."

<sup>41</sup> Michael Mastanduno, "Incomplete Hegemony: The United States and Security Order in Asia," in Alagappa, ed., *Asian Security Order*, pp. 141-70.

ながら、これらの理由にもかかわらず、マスタンドゥーノは、米国の支配に対する潜在的競争相手の重大な挑戦を未然に防ぐ米国政府の能力が、それらの国の容認姿勢と合致していなかったために、米国の覇権は不完全であると主張する<sup>42</sup>。

リーファーが米国の地域秩序への重要性を誇張していると見て、彼を批判する者がある。アチャリヤとタンにとっては、東南アジアにおける米国の地域秩序への貢献は、重要ではあるが不当に誇張されるべきでないとする正当な理由がある<sup>43</sup>。第1に、米国の大規模な世界戦略における東南アジアの地位は、北東アジアを含む他の地域に比べて特別に目立つものでなかった。第2に、米国のこの地域に対する関心の欠如は、9・11事件により基本的に改善されたが、対テロ戦争における米国主導のアプローチは、米国政府が実施した戦争のやり方について地域に疑念を生んだ。第3に、米国の東南アジアにおける戦略的プレゼンスは、米国の地域の同盟国およびパートナー タイ、フィリピン、および南ベトナム を(いくつかの例では貢献があったかもしれないが)低強度紛争と国内紛争から守ろうとしなかった。第4に、国際秩序の確立と維持の上で、一般的に大国は唯一の、あるいは主要な公共財の供給者になる傾向があるが、この点について東南アジアの経験は、きわめてあいまいである。すなわち、相対的に弱い地域国家や機構が、大国と同様に地域安全保障の提供者の機能を果たしており、また彼らの不確実で部分的な提供であっても、実は米国に恩恵を与えている。

重要なことは、均衡であれ、覇権であれ、ここで誰も疑わないことは アチャリヤとタンも間違いなくそうであるが 東アジアにおける地域秩序に対する米国の戦略的重要性である。もっと重大な問題は、おそらく、米国がその覇権の地位をどう維持し、または高めるかに関係がある。修正主義者的アプローチの採用は、おそらく紛争を惹起するものであり、それによって東アジア地域秩序を一層空洞化し、不安定にする恐れが少なからずある。

---

<sup>42</sup> Mastanduno, "Incomplete Hegemony: The United States and Security Order in Asia," pp. 157-58.

<sup>43</sup> Acharya and Tan, "Betwixt balance and community: America, ASEAN, and the security of Southeast Asia."

## 地域秩序の重要な要素としての実行可能な規範の枠組み

リーファーが地域秩序の重要な要素として規範の概念に反対でなかったことは、これまでも強調されてきた。多くの者から、間違いなく今日の東南アジアの国際関係論における最高の権威であるリーファーの後継者と見なされるアミタブ・アチャリヤは、明らかに構成主義者である彼の著作とリーファーのものとの「本当の違い」は、「地域主義が重要かどうかはそれほど問題ではなく、地域主義のどんな条件が重要なのが問題である」点にあると述べている<sup>44</sup>。アチャリヤに関する限り、地域主義が重要である条件は、明白に規範的なものである。第1は、特定の外交的慣習の「現地化」である。国家主権、不干渉、合意（コンセンサス）による決定（すなわち「ASEAN方式」）がこれに当てはまるが、他のものは除く。第2は地域アイデンティティの出現で、この両方が東南アジアの初期的安全保障共同体の進展に寄与した<sup>45</sup>。重要なことは、アチャリヤらにとり<sup>46</sup>、これらの条件 規範およびアイデンティティこそが、東南アジアおよびアジア太平洋における国際関係についての彼らの主張と現実主義者の主張、特に（しばしば言及したとおり）リーファーのものとを区別する点である。

しかし、これまで見てきたとおり、リーファーは明らかに規範の論議をにべもなく排除したわけではなかった。実際、地域関係秩序はどう形成されるべきかに

---

<sup>44</sup> Amitav Acharya, "Do norms and identity matter? Community and power in Southeast Asia's regional order," in Liow and Emmers, eds., *Order and Security in Southeast Asia: Essays in Memory of Michael Leifer*, p. 78.

<sup>45</sup> アミタブ・アチャリヤの次の論文を参照: "How Ideas Spread: Whose Norms Matter? Norm Localization and Institutional Change in Asian Regionalism," *International Organization*, Vol.58 (2004), pp. 239-75; *Constructing a Security Community in Southeast Asia: ASEAN and the Problem on Regional Order* (London and New York: Routledge, 2001);および*The Quest for Identity: International Relations of Southeast Asia* (Singapore: Oxford University Press, 2000).

<sup>46</sup> Alice D. Ba, "China and ASEAN: Re-navigating Relations for a 21st Century Asia," *Asian Survey*, Vol.43, No.4 (2003), pp. 622-47; Nikolas Busse, "Constructivism and Southeast Asian security," *The Pacific Review*, Vol.12, No.1 (1999), pp. 39-60; Jürgen Haacke, "ASEAN's diplomatic and security culture: a constructivist assessment," *International Relations of the Asia-Pacific*, Vol.3 (2003), pp. 57-87; Hiro Katsumata, "Reconstruction of Diplomatic Norms in Southeast Asia: The Case for Strict Adherence to the 'ASEAN Way,'" *Contemporary Southeast Asia*: Vol.25, No.1, (2003), pp. 104-21; Hiro Katsumata, "Why is ASEAN Diplomacy Changing?" *Asian Survey*, Vol.44, No.2 (2004), pp. 237-54; Shaun Narine, *Explaining ASEAN: Regionalism in Southeast Asia* (Boulder: Lynne Rienner 2002).

関して国家間で理解を共有する概念は、リーファアの地域秩序の概念にとってきわめて重要であった。したがって前述のとおり、リーファアが東アジアと東南アジアにおける地域秩序 すなわち、「大規模」な性質の地域秩序は、とらえどころがないと思ったのはこの理由からである。欠けている要素 東アジアの人々の間で共有する価値 の認識を提示しないのはリーファアだけではない。シェルドン・サイモンは東アジアについて以下のように主張する。

共通の価値、連動する歴史、および人と企業の国境を越える自由な移動で構成される真の共同体は、まだこの地域に存在しない。それゆえ、法的手順に基づく政策決定を要する政治的制度の創設については、何の動きも見られない。制度を首尾よく機能させるには、費用の共同分担および利益の共有に加えて目的の共通認識が必要である<sup>47</sup>。

冷戦後のアジア太平洋における安全保障制度化の見通しとの関連で述べられたサイモンの言葉は、域内各国の間で共有する前提、価値および利益の観点から同様に不完全であると理解されるリーファアの東南アジアの描写にある意味で役に立つ。「ASEANは、安全保障を共通の価値と利益に基づく地域全体の関係を形成するまでには促進できなかった<sup>48</sup>」。また、かかる見解は、地域の問題は地域で解決するというインドネシアが長く唱えてきた主張に関する彼の考えを示すものである。「地域の問題は地域で解決するという概念に内在するものは、『自然』地域があるのみならず、域内諸国が地域の問題の性質とその対策について同じ意見を共有することを前提とする<sup>49</sup>。」

ここで我々は、アチャリヤなど明らかに構成主義者であり、規範に特に重点を置くアナリストよりは、リーファアの方が規範の共有と堅持 「共通の価値と利

<sup>47</sup> Sheldon W. Simon, "Security, Economic Liberalism, and Democracy: Asian Elite Perceptions of Post Cold War Foreign Policy Values," *NBR Analysis* (Summer 1996), pp. 5-32. ジョーンズとスミスによる鋭い批評は、ASEANが高く評価する不介入の原理それ自体が、地域共同体とアイデンティティの表出を事実上否定すると主張する。David Martin Jones and Michael L. R. Smith, "ASEAN's Imitation Community," *Orbis* (Winter 2002), pp. 93-109.

<sup>48</sup> Leifer, *ASEAN and the Security of South-East Asia*, p. 157.

<sup>49</sup> Michael Leifer, "Regional solutions to regional problems?" in Gerald Segal and D. S. G. Goodman, eds., *Toward Recovery in Pacific Asia* (London: Routledge 2000), pp. 115.

益」に相当に高い基準を設定していることがわかる。リーファーが、東アジアを偶然の地域秩序を構成する地域と見なしているか否かについてはすでに議論した。実行可能な規範枠組みが地域秩序に必要であることは、ここでは問題でない。むしろ、かかる枠組みがすでに存在しているか否か アチャリヤは「イエス」、サイモンは「ノー」、リーファー（およびアラガッパ、コン、ゾーリンゲンなど）はおそらく状況による が、東アジアをめぐる議論の論点になるとと思われる。

### 地域主義は地域秩序にとり特定の条件下で重要

きわめて不幸なことに、ジョン・ミアシャイマーの国際機構に対する猛烈な攻撃は、多くの者にとって、国際関係における制度主義 また暗に地域主義 の顕著さを表面上却下する現実主義の旗手と映った<sup>50</sup>。確かにリーファーについては、彼の東南アジアの地域主義に関する見解にかぎり同じであるといえない。確かにリーファーは、少なくとも3度、地域問題の研究に無批判に最新の理論的枠組みを適用する（と彼が見なす）アナリストによる理論的な一時的流行と感じたものに対し、直ちに警告を出した<sup>51</sup>。彼はごく最近、ASEAN地域フォーラムを介したアジア太平洋に広がる地域主義が、アジア太平洋の国際関係の新たなパラダイムになると主張する者と、彼らの主張を聖書の「基礎を持たないで仕事をする（building bricks without straw）」比喩と同等と見なして忘れられない論争を展開した<sup>52</sup>。リーファーは、以上のすべてのことに、その成果を誇張することなく東南アジア地域主義の（彼が考えたとおりの）意義を正式に認めた。コンが我々に気づかせてくれたとおり、リーファーは彼の記述の中で「ASEAN諸国間の『競合する』および『共通する』前提を周到に公正に<sup>53</sup>」証明したが、その意味は、彼がASEAN諸国間の共通性と協力の事例の受け入れを拒絶しなかったことである。どちらかといえば、リーファーの批評家が、彼の地域秩序に対する米国の役割

<sup>50</sup> John Mearsheimer, "The False Promise of International Institutions," *International Security*, Vol.19, No.3 (1994/5), pp. 5-49.

<sup>51</sup> Haacke, "Michael Leifer, the balance of power and international relations theory,"

<sup>52</sup> Leifer, *The ASEAN Regional Forum*.

<sup>53</sup> Khong, "Michael Leifer and the prerequisites of regional order in Southeast Asia," p. 37.

と勢力均衡のダイナミクスが誇張されていると見て抵抗するように、地域主義に関するリーファアの均衡のとれた考慮は、トラック1かトラック2かを問わず、地域機構の東アジア地域秩序に対する誇張された貢献への公平な警告といえる。リーファアより間違いなくはるかに地域主義を重視する者を含むごく最近の論文は、リーファアの暗黙の警告に留意しているように思われる。例えば、アチャリヤおよびタンは、地域の安全保障が、ASEANを中心とする包含的かつ協力的な多国間秩序の存在に多分に帰するという結論を出していない<sup>54</sup>。彼らがそれに代わり議論することは、初期の、しかし徐々に流行となってきた「ソフト」な多国間主義とプロセスがなければ、東南アジアの安全保障は以前よりはるかに悪くなっていたであろうことである。東アジア地域主義（ASEANプラス3、東アジアサミットなど）の拡大により、東アジアの地域秩序がかかるソフトな多国間主義による対話から利益を得ると考えられないことはないが、それは、いわば米国の優越性、2国間同盟、自主独立および勢力均衡戦略というジンとベルモットでマテイーニを完成させる飾りのオリーブである<sup>55</sup>。

### 地域秩序の管理において、保全是革新より重要性が高い

最後に、我々は、リーファアが東南アジア地域秩序の問題に関する意見で、「ASEANにとって差し迫った地域秩序の問題は、革新ではなく、保全の問題である<sup>56</sup>」と述べたことを当然に思い出す。同様に、おそらくリーファアが、これがアジア太平洋の地域秩序の形成が直面する重要な課題でもあったと考えたことは、地域の変革に理想主義的な夢を適用すべきでないこと、また地域秩序構築の努力において基礎を持たずに仕事をするを決して試みてはならないとする彼の主張から明白である<sup>57</sup>。簡単にいえば、その意図は現状維持である。重要なこと

---

<sup>54</sup> Acharya and Tan, “Betwixt balance and community: America, ASEAN, and the security of Southeast Asia.”

<sup>55</sup> 本著者は、この隠喩をロン・ヒュースケン（Ron Huisken）のアジア太平洋多国間主義に関する記述から引用した。

<sup>56</sup> Leifer, *ASEAN's Search for Regional Order*, p. 21.

<sup>57</sup> Leifer, *The ASEAN Regional Forum*.

は、リーファーは明らかに本質的には革新に反対ではなかったことである。実際、ASEANの地域融和に関する彼の多くの随想は、ASEAN参加国 ほとんどが独立直後で互いを警戒しており、インドネシア、マレーシア、シンガポールは「対決」政策という困難な経験をしたばかり が直面した地域機構建設という新奇な挑戦を見事に解決した外交的革新と想像力について詳述している<sup>58</sup>。むしろ、彼の関心は、彼の言葉を借りれば「大規模な (grand scale) 」地域秩序の革新に係る。リーファーは、地域協力と地域機構の問題をASEANの発足前から研究していたため、その重要性を認識していた<sup>59</sup>。すなわち、彼は、地域主義の問題について誇張して述べることや、東南アジア (あるいは特定の地域) 固有の文脈において、どのような地域主義が達成できるかについて根拠のない主張をすることに対してきわめて慎重で、国や地域の野心的な目標と、地域の現実の間を常に賢明に区別した。

しかし、それだけで地域の現状維持が「何もしないこと」として単純に理解することはできない。リーファーの論点も、保全是困難な仕事であり、特にその地域内において、コミュニティ同士が長期にわたる領土紛争や国境を越える問題の台頭など、数多くの未解決の問題を抱え、お互いを不信と疑念で見続けている場合は容易でないということである<sup>60</sup>。これは東アジアの地域秩序にとっても同様の問題である。東アジア地域における多くの不安定要因は、地域秩序の形成および維持をきわめて錯綜した複雑な問題にする。新しい地域機構および多国間安全保障構造 新たに発足した東アジアサミットはそのよい例である の構築による革新の試みは、すでに次の10年に入ったが、立派な行動計画を自慢しているにもかかわらず、なお信頼関係が窮地にあるARFの経験、または同様にAPECのまったくひどい事例が示すとおり、集団的地域目標の実現を妨害し、また妨害しようとする国家間の優先事項の衝突を必ず考慮しなければならない。

<sup>58</sup> Leifer, *ASEAN and the Security of South-East Asia*.

<sup>59</sup> Liow and Emmers, "Introduction."

<sup>60</sup> 例えば、Mely Caballero-Anthony, Ralf Emmers, and Amitav Acharya, eds., *Non-Traditional Security in Asia: Dilemmas in Securitisation* (London: Ashgate, 2006); Andrew Tan, *Intra-ASEAN Tensions* (London: Royal Institute of International Affairs, 2000)を参照。

## 結論

すべてのことを考慮した上で、東アジアの地域秩序の見通しは、地域の現実から遊離した地域主義者の根拠のない主張を退けられる限り、おそらく慎重な楽観である。ASEANが東南アジアにおいて安全保障共同体の進展を求めている今、東アジア地域、特にその東南アジアのサブシステムは過渡期にある。ASEANプラス3が、東アジアサミットとともにASEAN安全保障共同体のプロセスから発生する潜在的相乗効果を促進できるか否かは依然として不透明である。地域秩序に関するリーファーの見解は、どちらかといえば、東アジアの経済・安全保障地域主義の成長から否応なく発生する地域秩序と共同体の不適切な誇張に対する警戒の重要性を強調する。しかし、警告にかかわらず地域秩序の可能性は広く残されている。